

## 【主】のわざに励む 実践編

コリント人への手紙 第一 16章 1~4節

2026年3月8日(日) 礼拝

### ■ 主要聖句

私がそちらに行ってから献金を集めることがないように、あなたがたはそれぞれ、いつも週の初めの日に、収入に応じて、いくらかでも手もとに蓄えておきなさい。

(コリント人への手紙 第一 16章 2節)

### 序論：前章（15章）からの流れ

- 15章：キリストの復活・死者のよみがえりという信仰の土台を壮大なスケールで語った
- 復活の希望・永遠の命・死に対する勝利の約束 → その輝かしい結論が15:58の「主のわざに励む」命令

15:58 ですから、私の愛する兄弟たち。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは、自分たちの労苦が主において無駄でないことを知っているのですから。

- 問い：「主のわざに励む」とは具体的に何か？ → 16章 1~4節が実践的な答えを示す

### 1) 献金遂行の命令（16:1）

「さて、聖徒たちのための献金については、ガラテヤの諸教会に命じたとおりに、あなたがたも行いなさい。」

### この献金の目的

- 教会運営費ではなく、エルサレム教会の貧困な信徒を支援するための献金

### エルサレム教会が支援を必要とした3つの理由

- ・ ① 激しい迫害と社会的孤立（ユダヤ人による継続的な迫害・神殿経済からの排除）
- ・ ② 紀元41~54年の大飢饉の影響が残存し、経済的回復が困難
- ・ ③ 初代教会の共有財産が底をつく（就労困難によりさらに悪化）

### この献金の神学的意味（ローマ 15:26~27）

- 単なる人道支援ではなく、福音の恵みへの応答
- 異邦人とユダヤ人の隔ての壁を超えた、教会としての愛の業
- 「ロギア」（自発的な捧げ物）- 強制徴収ではなく、信仰に基づく献げ物
- 今日の実践：国内・国外宣教献金、謝恩デー献金など、教会の枠を超えた献金も「主のわざ」

## 2) 献金の仕方 (16:2)

「私がそちらに行ってから献金を集めることがないように、あなたがたはそれぞれ、いつも週の初めの日に、収入に応じて、いくらかでも手もとに蓄えておきなさい。」

### 聖書的な献金の4つの基本原則

- ・ ①「あなたがたはそれぞれ」－ 全てのキリスト者がそれぞれの判断と責任で献金は、立場（貧富・自由・奴隷）に関わらず、各自が責任をもって担う奉仕。少額でも構わない。
- ・ ②「いつも週の初めの日に」－ 継続的に礼拝の一環として  
その場限りの思いつきではなく、継続的な献身の現れ。  
主の復活を覚える日曜日に取り分けることで、「主への捧げ物」という意識が生まれる。
- ・ ③「収入に応じて」－ 神の恵みに応じて  
原語は「（神様によって）豊かにさせられたかに応じて」。神様の恵みが先にあり、その応答として捧げる。無理な献金・借金献金は聖書的でない。
- ・ ④「蓄えておきなさい」－ 計画的に前もって聖別する  
慌てて取り繕うのではなく、あらかじめ備え、感謝をもって静かに捧げられるようにする。  
献金は、余り物・残り物ではなく、前もって聖別された献げ物として捧げる。

## 3) 献金の送金の仕方 (16:3~4)

「私がそちらに着いたら、あなたがたの承認を得た人たちに手紙を持たせてエルサレムに派遣し、あなたがたの贈り物を届けさせましょう。」

- 現代の銀行送金システムがない時代：教会が承認した人物が推薦状を持って直接届ける
- パウロの誠実さと透明性：個人の裁量ではなく、教会が全体の承認を経る
- この献金はパウロ個人の働きではなく、教会の働き
- 今日の実践：献金の管理は個人への信頼ではなく教会としての責任で行う。  
決算報告・監査・承認などの透明性を維持するプロセスが大切。

## 結論：復活の希望が生む「主のわざ」

なぜパウロは「復活」の壮大なメッセージの直後に「献金」の話をするのか？

- 死という最大の恐怖に勝利した者は、地上の物質的な執着からも解放されている
- 自分のものを握りしめる必要がなく、自由に・喜んで隣人のために仕えることができる
- 信仰は頭の中だけでなく、日常の具体的な「神様への応答」と「愛の業」として現れる

### 今週の実践へ

- ・ 神様から与えられた恵みを数え、その一部を聖別して備える
- ・ 献金は説教の感動の多少で決めるものではなく、信仰の計画的な応答として捧げる
- ・ 「自分の労苦が主にあって無駄でない」ことを確信し、それぞれの判断の中で主のわざに励む